

貴重な出版史料のひとつ

『繡像小説』主編を示す商務印書館の新聞広告

樽本照雄

汪家熔輯注『中国出版史料・近代部分』補巻下冊(宋原放主編 武漢・湖北教育出版社2011.2. 477頁)に奇妙な説明がある。『繡像小説』に関する注釈だ。

汪家熔は、従来からの彼の自説をここでもくりかえしている。私も反論して同じことを書く。

商務印書館が刊行した小説専門雑誌『繡像小説』の主編は、誰か。

討論がはじまったのは、1984年のことだった。

従来は李伯元だと考えられてきた。汪家熔はそれに対して異議をとらえた。李伯元自身が、そうだとは書いていない。友人たちの証言もない。つまり、決定的な証拠がない、と主張する。

では、誰か。

彼が取り出したのは夏曾佑だ。しかし、その確証はあるのか、と反論されるとすぐさま夏曾佑説をひっこめた。李伯元自身がそう述べていないのと同様に、夏曾佑も何も残してはいない。

決定的な資料は、商務印書館自身が出した新聞広告だ(別に掲げておく。機会あるたびに示した。ご存じの方もいるだろう。句読点は筆者)。

『時報』丁未九月初三日1907.10.9

商務印書館 / 南亭亭長 / 繡像小説

本館前刊繡像小説特延南亭亭長李君伯元總司編著。遠撫泰東之良規，近挹海東之余韻，或手著、或譯本、隨時甄錄，月出兩期。出版以來，頗蒙歡迎，銷流至廣。現已出至七十二期。因存書無多，特行減價零售。每冊二角。全部七十二冊

精裝六函，實洋七元二角。

版元の商務印書館は、『繡像小説』の編集には李伯元を招請したと公表している。よくご覧いただきたい。

私は、上海図書館におもむき資料を閲覧した。マイクロフィルムで確認した広告は、1907年10月9日、12日付『時報』、1907年10月9日付『中外日報』などだ。同文の広告が掲載されている。(以上は、本研究会ウェブサイト2001.4.19付で公開した。論文もいくつか書いたが煩瑣になるので省略する)

17年を経て学術討論は終了した。私は、そう考えた。ところが、そうはならない。

汪家熔『中国出版通史』7 清代卷(下)(北京・中国書籍出版社2008.12)は、『繡像小説』主編問題をむしかえしている。公の出版物では汪家熔はあいかわらず主編不明説を記述する。商務印書館の新聞広告についても、信頼しがたいと妙なことを述べるしまつ。振り出しにもどすつもりらしい。

私は、「『繡像小説』問題」と題して反論しておいた(『清末小説から』第96号2010.1.1、第99号2010.10.1)。

そうして今回の『中国出版史料・近代部分』補巻下冊だ。編者問題について汪家熔は、李伯元の知人が証言していない、と以前と同じことをくり返して主張している。

汪が注釈にいう。阿英は李伯元だとするが、胡適がかつて調査したことがあって、郷里の親戚が上海にいる李伯元の具体的活動を知っていたかどうかは疑わしい。李伯元の親友である歐陽鉅源の文章にも『繡像小説』を編集したことがあるとは書いていない。当時商務印書館の編集者だった蔣維喬は、李伯元と同郷だがそのことを述べたことがない。ひとつの説明があつて(つまり汪家熔の自説のこと)、該雑誌は夏曾佑の

1907年10月12日付『時報』(資料提供劉德隆氏)



編集だという。

汪家熔の説明は、27年前の昔にもどってしまった。

その間に行なわれた資料発掘を汪家熔は認めようとはしない。新聞広告については、まるで存在ないように振る舞っている。

李伯元が主編だという知人たちの証言がない。汪家熔は、それだけに注目する。しかし、主編だとする商務印書館の新聞広告は、彼は視野に入れない。おかしなことだ。

資料を無視しているのではないか、と汪家熔に指摘する『中国出版史料』の担当編集者はいないらしい。あるいは、商務印書館の新聞広告は出版史料として重要だから補巻にも収録したらどうか、と意見を出す人もいない。いたとしても、該巻は汪家熔が「輯注」するのだから、自分の思うように編集して書くのだろう。 罍

(清末小説研究会ウェブサイト2011.6.13付で掲載。表題をつけ、語句を改めた)

(たるもと てるお)